

28P-am04S

実務実習での服薬指導における学生のコミュニケーションスキル向上の自覚とその要因分析

○雑賀 海人¹, 鈴木 小夜¹, 菊山 史博¹, 横山 雄太¹, 地引 綾¹, 中村 智徳¹ (慶應大薬)

【目的】我々は、服薬指導回数の増加及び ENDCORE モデルにおける基本スキルや対人スキルの定着が、薬学実務実習における学生のコミュニケーションに対する不安軽減に繋がることを示した(第26回日本医療薬学会年会、2016年)。本研究では、さらに服薬指導回数と各スキルとの関係性とその定着要因について検討した。

【方法】2017年度慶應義塾大学薬学部5年生145名を対象に、実務実習直前及びI期実習後にアンケート調査を実施した。実際に実務実習を終えた学生の意見を基に作成した「服薬指導において実施できるようになったこと」の10項目をENDCOREモデルにおける基本スキル、対人スキルに対応させ、服薬指導回数との相関分析を行った。さらに、病院実習群及び薬局実習群を比較検討するために、不安に対する自由回答について対応分析を行った。

【結果と考察】実習開始前と比べ、I期実習終了後に基本スキル及び対人スキルのいずれも向上したと学生は自覚していたが($p < 0.001$)、不安は減少していなかった(病院群 $p = 0.109$ 、薬局群 $p = 0.201$)。服薬指導回数の増加と不安軽減との間に相関が認められ($r = 0.430, p < 0.001$)、対人スキル向上の自覚にも相関の傾向が認められた($r = 0.373, p = 0.001$)。一方、病院群ではいずれについても相関は認められなかった。病院群は知識に対して、薬局群は共感の姿勢に対して不安を抱いていた。以上より、薬局実習群では服薬指導回数の増加が対人スキルの向上を自覚させ、共感の姿勢を学ぶ機会の増加が不安軽減をもたらすと考えられる。一方、病院では知識をつけることで不安が軽減される可能性が示された。今後さらに、病院、薬局双方の実習を終えた時点で、基本スキル、対人スキルの定着要因を解明することで、実務実習の服薬指導に対する学生の不安軽減を目指す。